

家族団らんで営む低投資の タイストールによるメガファームの実現

—自分で考えた酪農経営の追求とその実践—

藤田 貴良・麻奈美（酪農経営・岩手県八幡平市）

地域の概況

藤田貴良氏・麻奈美氏が酪農を営む八幡平市は、岩手県の北西部に位置し、西は秋田県、北は青森県と隣接し古くから交通の要所として発展している。中でも、牧場がある松尾地区は八幡平市の南西部に位置し、岩手の最高峰岩手山や八幡平、奥羽山脈に囲まれた中山間地域であるが、比較的広大な畑地が広がり、気候・地形を生かした高冷地野菜等の耕種農業と酪農および肉用牛の大家畜を主とした畜産が基幹産業である。酪農家の1戸当たり飼



（写真1）藤田夫妻（右 貴良氏、左 麻奈美氏）

養規模は中規模であり、高齢化や労働力不足、農家戸数の減少などが課題となっている。

（表1）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
平成6年	酪農 稲作	経産牛16頭 水稲3ha	17ha	父が酪農経営と稲作を営み、貴良氏は農協職員、酪農ヘルパーとして就職
平成16年	酪農 稲作	経産牛16頭 水稲3ha	17ha	農協職員、酪農ヘルパーとして10年間従事後、28才で就農
平成18年	酪農 稲作	経産牛40頭 水稲3ha	30ha	牛舎を増築し、経産牛24頭増頭、牧草地30haに拡大
平成25年	酪農専業	経産牛60頭	60ha	搾乳牛舎を増築し、経産牛20頭増頭。水田を無くし、牧草地を60haに拡大
令和元年	酪農専業	経産牛60頭	60ha	岩手県農業農村指導士の認定を受ける
令和2年	酪農専業	経産牛73頭 育成牛40頭	60ha	近代化資金を借り入れ、搾乳牛舎とバルク機械室を増築し、100頭搾乳の体制整備
令和3年	酪農専業	経産牛73頭 育成牛40頭	60ha	いわて農林水産振興協議会（会長：岩手県知事）主催の意欲ある担い手賞を受賞
令和6年	酪農専業	経産牛114.1頭 育成牛76.8頭	90ha	牧草地を90haに拡大し増頭
令和7年	酪農専業	経産牛114.1頭 育成牛76.8頭	90ha	酪農雑誌が開催した、「第43回オールニッポン・ホルスタインコンテスト」において、2歳経産ジュニアクラス準オールニッポンを受賞

経営・活動の推移

父が酪農と水稻経営をする中、平成6年、貴良氏は高校卒業後農協に就職し、畜産指導と酪農ヘルパーとして10年間従事後、「自分で考えた酪農経営の可能性を追求したい」と考え平成16年に就農した。翌年麻奈美氏と結婚し、平成18年に経営承継後、計画的な牛舎の増築や草地拡大を重ね、現在は経産牛平均飼養頭数114.1頭、育成牛76.8頭を家族4名体制（本人夫婦と妻の弟妹（パート））で飼養しており、子供たちも積極的に作業に加わっている。

粗飼料はほぼ自給し、堆肥は草地還元および稲作農家との稲わら交換等を通じて地域内での循環型酪農・耕畜連携を実践している。

（表2）経営実績（令和6年）

経営概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	23人
		雇用・従業員	1.1人
	経産牛平均飼養頭数		114.1頭
	飼料生産	実面積	9,000a
	年間総販売乳量		1,045,248kg
	年間子牛販売頭数		36頭
	年間育成牛販売頭数		13頭
	年間経産牛販売頭数		22頭
収益性	所得率		25.9%
	経産牛1頭当たり生産費用		1,158,476円
生産性	牛乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量	9,161kg
		平均分娩間隔	14.3ヵ月
		受胎に要した種付回数	2.6回
		平均産次数（期首）	2.6産
		平均産次数（期末）	2.5産
		牛乳1kg当たり平均価格	143.3円
		牛乳1kg当たり生産費用	126.5円
		乳脂率	3.94%
		乳蛋白質率	3.42%
		無脂乳固形分率	8.79%
		体細胞数	7.4万個/ml
		借入地依存率	91.0%
		飼料TDN自給率	52.6%
		乳飼比（育成・その他含む）	38.8%

貴良氏は、酪農ヘルパー業務の経験を生かし、計画的な牧草地の面積拡大および増頭と牛舎内作業のルール化で、人にも牛にも無理のないゆとりある酪農経営を実践している。

良質な生乳の生産を目指した取り組みが管理全体の改善につながり、その結果、収益の安定化を実現した。また、令和6年の成績は、個体乳量9,161kg、体細胞数7.4万/ml、細菌数0.5万/mlと極めて高品質な生乳となり、岩手県乳質改善大賞を平成28年から9年連続、合計11回受賞するなど、地域を牽引する担い手となっている。

経営・技術の特色等

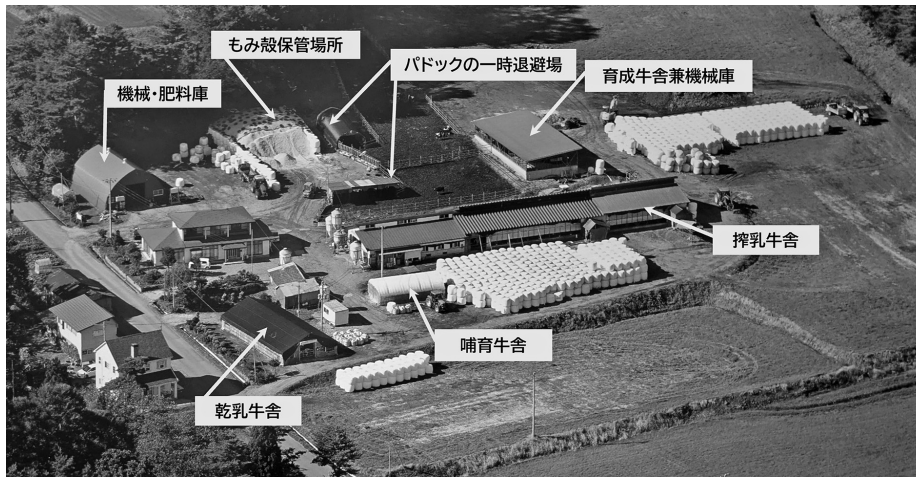
【草地面積の拡大に伴った無理のない投資による段階的な規模拡大】

平成16年に就農後、既存の繋ぎ牛舎を3回にわたり増築し、現在の経産牛114頭まで拡大した。近隣の営農中止等による農地の集積により牧草地を確保し、その面積は就農時の17haから現在90haとなった。草地面積の拡大に伴い計画的に自家産後継牛も増頭しながら経営の規模拡大を行ってきた。

牛舎内は省力化のための機械投資は最小限とし、既存の労働力・施設を有効活用することで家族労働によるタイストールメガファーム（年間出荷乳量1,045トン）を実現した。近年、100頭規模のタイストール牛舎では自動給餌機等の省力化機器やTMR給餌器を整備しているが、投資抑制の観点などから、導入していない。

【牛舎作業の効率化とキャトルセンター利用による省力化】

牛舎は対頭式（牛の頭が向かい合う）のため、効率的に粗飼料摂取量をまかなう給与が可能であり、濃厚飼料に頼らず高い個体乳量を実現している。



(写真2) 牛舎等配置

牛舎作業はルール化し、2～3人で作業を短時間でできる体制を整え、繁忙期でも定時で作業を終了することができる。妻の弟妹（パート）に加えて、現在は農業高校に通う娘が作業に加わり大きな労働力となっている。

経営拡大と父母の高齢化による引退を契機に育成牛



(写真3) 乳質改善大賞受賞



(写真4) ジェラート店のぼり

は全て地元のキャトルセンターに預託し、労働力は搾乳牛の飼養管理と粗飼料生産に集中している。妻の哺乳作業が軽減された分、販売子牛（和牛受精卵移植含む）の管理に集中することができたため、増体が向上し、販売額が増加した。また、旧育成牛舎を乾乳牛管理に活用し、搾乳頭数を増加することで生乳販売量を拡大しながら、さらに自給飼料の余剰分や、初妊牛の販売によって、生乳以外の販売収入も確保されている。

【乳質へのこだわり】

良質乳生産を目標に乳房炎対策を徹底した結果、周産期疾病の減少、乳量の増加、繁殖成績の改善等が図られた。その結果、岩手県乳質改善協議会（全農岩手県本部）主催の岩

手県乳質改善大賞を平成28年から9年連続、合計11回受賞し、現在も継続して受賞を目指している。

また、高い乳質が評価され地元のジェラート店へ生乳の一部を出荷している。

自ら6次産業化しなくても、地元業者との連携を通じてやりがい・喜びを得ており、さらなる高品質な生乳生産への意欲につながっている。

【家族団らんの家族労働】

現在、家族労働力は夫婦2人とパート雇用の弟・妹の他に子供たちが加わる。

対頭式牛舎の真ん中の広い飼槽通路は小さい時から子供たちの遊び場でもあり、家族団らんの場となっているため、自然に牛舎仕事

を手伝い、小学生の次女も給餌作業から搾乳作業までできるようになった。

家族の意見は否定せずに取り入れており、全員のモチベーションとスキルの向上が図られている。

【優れた搾乳衛生】

良質乳生産のため、搾乳衛生の基本を徹底し、搾乳機器部品の早期交換や岩手県畜産協会が実施するミルクシステム診断を定期的に受診し、不具合の有無を確認している。また、牛床には稲わらやもみ殻、ドロマイト石灰などの資材を毎日散布し、乾燥状態を保ち、さらに乾乳中の乳房炎対策のため外部乳頭シール（ティートナー）を活用している。乳房炎の発生は数ヵ月に1頭程度で、搾乳作業時間の短縮と高品質乳の生産につながっている。

【飼養・衛生管理について】

給与飼料は、牧草、発酵飼料、配合飼料、トウモロコシ圧片、添加剤のみで、乳量・コンディションに応じて配合飼料のみ3段階で変更している。高泌乳でも濃厚飼料の給与量上限を11kg/頭/日と設定し、牛に無理をさせないため疾病の発生はほぼ無く、年間個体乳量は1万kg前後で推移している。発酵飼料は自給牧草の品質変化の影響を緩和するために

一定量給与している。

牛舎内は毎月3回、専門業者による煙霧消毒を実施することでウイルス性疾病の拡大が抑えられ、害虫も減少し、牛と人のストレス低減につながっている。

【繁殖管理の省力化】

繁殖管理を担っていた母のリタイアを契機に発情発見装置（ファームノートカラー）を導入し、獣医師のプログラム授精を併用することで繁殖管理の省力化が図られている。

【牛群改良について】

3年前からはゲノム検査を開始し、高能力牛には雌選別精液、低能力牛には和牛受精卵を用いることで、改良と販売の両立を図ってきた。

こうした取り組みの結果、酪農雑誌が開催する第43回オールニッポン・ホルスタインコンテストにおいて、2歳経産ジュニアクラスで準オールニッポンを受賞するなど、改良の成果が表れている。

【粗飼料生産について】

飼料収穫は家族全員で協力して行い、大型機械の導入により広い面積でも短期間で適期収穫が可能となっている。全圃場で年3回の刈り取りとロールラップサイレージの調製に



（写真5）清潔な搾乳処理室



（写真6）ミルキングシステム診断結果（適合シール）

より、自家給与分に加えて販売分も確保することで、飼料コストの削減と、圃場ごとの飼料分析や草地の更新・追播、堆肥の還元により、収量向上と肥料費削減を実現している。



(写真7) 収穫後のロール

【耕畜連携について】

敷料や堆肥の水分調整材として必要な稲わら・もみ殻は、近隣の稲作農家から堆肥と交換で確保している。10ha分は稲作農家の水田へ堆肥散布を行い、稲わらを収集し、さらに水田100ha分のもみ殻を譲り受け、年間通して使用する量を十分確保できている。



(写真8) 稲作農家の稲わら収穫作業

地域に対する貢献

貴良氏は、これまで新しいわて農業協同組合八幡平酪農生産部会副会長をはじめとする役職を勤め、関係機関と酪農家の橋渡し役や酪農振興の旗振り役として活動してきた。

近年は子供たちとともに共進会等に参加し、地域コミュニティの構築に取り組んでいる。

優良経営の酪農家として、県内外から視察研修を積極的に受け入れ、農場経営のノウハウについて隠さず紹介するとともに、視察訪問者との情報交換により自らの経営発展につなげている。

また、地元中学校の職場体験を受け入れるなど、酪農に対する理解醸成に努めている。



(写真9) 研修の受け入れ

女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取り組み

【妻の経営参画】

妻の麻奈美氏も飼養管理の改善について提案するなど経営に積極的に関わっている。

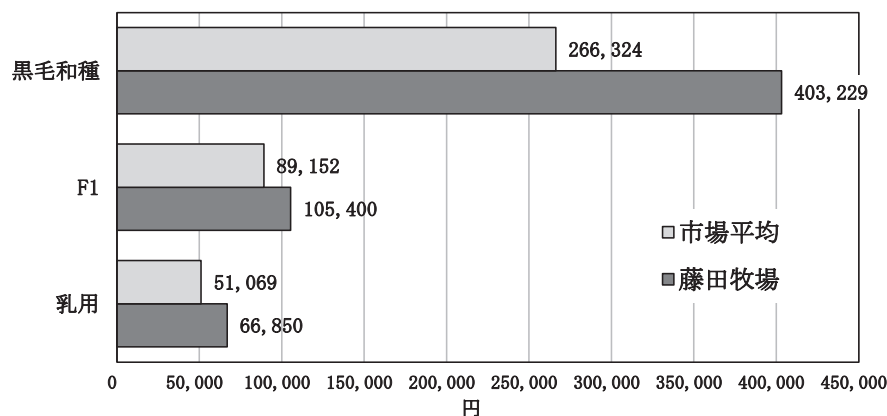
販売向け子牛の哺育を担当している麻奈美氏は、他の農家との情報交換などにより、自ら哺育方法を工夫し、増体を向上させ、岩手県の市場平均価格より高値で販売している。

【SNSによる情報発信】

麻奈美氏はSNSを活用し、子供たちが牛と関わる様子や牛舎内外の作業風景などの日常を配信することで、酪農の楽しさややりがいを伝えるとともに、牧場の認知度向上にも寄与している。

【働きやすい職場づくり】

平成19年3月に家族協定を締結し、家族の役割や報酬を明確にして、働きやすさに重点を置いた経営を確立している。さらにより優



(図1) スレ子・スモール子牛価格の比較(令和6年)



(写真10) 藤田牧場Instagram

れた労働環境の構築のために、今後法人化も視野に入れている。

酪農ヘルパーは、不在時に起こるトラブルに対応するため、夫婦別々に月3～4回定期的に利用し、旅行や子供の県内外のスキー大会へ必ず同行するなど、必要な休息や家族との時間を大切にしながら、ゆとりある経営を実践している。

将来の方向性

【次世代への継承】

長男は現在帯広畜産大学に入学し酪農の知識を習得中であり、長女は盛岡農業高校の3年生として在学中で、10月に北海道で開催された、第16回全日本ホルスタイン共進会の全国高校生リードマンコンテストに本県代表として参加し、卒業後は酪農経営を手伝う意向である。



(写真11) 県共進会への出品

北海道で勉強中の長男は、牛群改良や共進会に興味があり、他地域の若手酪農家ともSNS等を通じて情報交換している。

昨年、県の共進会で活躍した藤田牧場の牛が前述のコンテストで受賞した出来事が、共進会に出場した長男にとって大きな励みとなった。

貴良氏は、子供の就農後に提案があれば積極的に意見交換し、飼養管理の改善や新たな取り組みを柔軟に取り入れようとしている。

【今後の経営計画】

現状の頭数を上限とし、人にも牛にも負担をかけない規模での酪農経営を継続し、良質乳の安定出荷を目指している。近隣農家の牧草地管理を請け負うことで収入を得るとともに、農地の荒廃防止にも寄与したい。過剰な投資を避け、後継者が就農しやすい環境づくりを進めながら、法人化など経営上の利点について税理士と相談し、検討していくこととしている。